

小松の職人たち

今も残る小松町の職人の居住した町名地図



(昭和11年小松町図を参考に職人の多く住む町名を朱記した)

戦国時代よりの城下町町名由来の観
点は多様である。①城主等の出身地②

居住した武家(屋敷)名③集団居住した職人・商人④社会構成上の機能(寺院群)等から付けられている。近世小

松城下(小松川北地域「本折」)において、

幾例かが近代を経て現代に継がれている。①の例に松任町や本折町、②金沢市の長町や飛梅町の如き由来の類例はない。利常薨去後、殆どの家臣が金

沢へ転居したためである。旧三日市町^{じかた}地方や八日市町地方に射手町・射手衆町が利常在城時には存在した。戦国時代、了助手柄に由来する龍助町名が伝わっている。③材木町、細工町(二部

柳町)、本・新鍛冶町、大工町、塗師屋町(現上寺町)、茶屋町、魚屋・米屋町(現西町)、鉄砲町(現鷹匠町)、④寺町、小馬出町(御馬出)、土居原町、泥町(大川町)、三日市町、八日市町(旧五

日町)、清水町(旧そうけ町)、河岸端^{かしばた}通り、特別に大文字町(南端は桶屋町、明治三年に変更)がある。

美術工芸に関する細工人として多く輩出した大文字町の中で、表具師(文化十年には小松町に一二軒、明治九年には九戸、昭和初期には二五軒、戦後九軒に減少)として、小松の第一人者新藤與吉(精華堂、その弟子の金砂子を使う加藤佐一がいた。

大工棟梁のうち、宮大工として技術を高く評価されている人(神



表具師(金砂子) 加藤佐一の細工の一端。県外においても著名であった。(平成元年80歳当時)



石工の技を後世に残す作品の数々 中谷篁氏の工房展示物の一部



大工道具(数寄屋造りの用具の一部) 旧下牧町松本家作業場(ハンニヨンドン)で撮影(平成元年)

社寺院の改築時棟札に記されている人物に、南部重造がいた。那谷寺の重要文化財の修復や赤瀬那殿観音堂の再建、曳山修繕等(設計図等一八神社に及ぶ)の功績は光る。数寄屋風の大工に下牧

町の松本喜一郎がいた。金平町の水野太三郎も名うての棟梁だった。石工 地場産業の一つである石材加工には無名の石工が多い。墓石の他に、神馬や神牛燈籠、多重塔、手水舎(里川町の前田氏)にその技術の精緻を見てとれる。滝ヶ原町では、牧野良重の人物像やアーチ石橋群の架設模型を製作している中谷 篁のように、後世に残



塗師屋(小松城中の職人)による小松城の造作の一部(加賀八幡・八幡神社所蔵)

す努力をしている。

彫り物師・塗り物師 加賀八幡の八幡神社に小松城御殿使用の欄干(小松城塗師右衛門の銘)が残り、城中のみならず、曳山の修復にも関わっている。

鍛冶職人 細工物の金具師の他、本鍛冶町では小松城拡張に伴い御用鍛冶となり、土地免租の優遇を受け、刀剣製造のほか明暦年間には、農具製造を独占する。明治中頃より鉄歯の稲扱ぎの専売製造で盛況をなし、中部北陸を販路とし小松の特産となる。明治後期には年間四万丁を生産したが、大正期に足踏み機が普及したため、急速に衰えた(『むかしの小松』)。藩政期、新鍛冶町・横町に和釘職人が移住し、主として城内の受注に応じた。明治初期北

海道開拓使御用として、小松釘が北海道へ。明治末に洋釘中心となり衰えていく。組頭に大屋・太田家が充てられていた。

和菓子職人 華道とともに茶道の盛んな土地柄、それに伴う和菓子の手作り銘菓が要求された。天保年間を創業とする行松家には、銘柄製造のための技を口伝の他に、文書記録で伝授している資料(『菓子研究覚帳』)がある。各和菓子店には独特の木型も残されている。(山前圭佑)



菓子研究覚帳(行松家所蔵) 和菓子作りの詳細な記録が彩色でもって記録されている(茶人好み「秋の尾」の一部)